

偶然性についてのノート(2) — J. ハバーマス

米 永 政 彦

一。はじめに

ハバーマスは偶然性について、「偶然性とはなにか」と形而上学的身ぶりで大上段に振りかぶった議論はしていない。このことは彼の「ポスト形而上学的思考」の主張、あるいは言語を基本的に間主観的な相互行為の観点から捉える普遍的語用論の主張からしてある意味では当然のことと思われる。しかし、時代のアクチュアルな問題を正面から見据え、それと思想的に格闘するという、「時代の息子」としての思想家の立場を明確に表明し、実践しているハバーマスにとって、偶然性の問題は必ずしも小さい問題ではない。というのは前稿でも触れたように、ハバーマスにとって現代は「ポスト・モダン気分」の支配する時代であり、多、差異、他者が称揚され、「一にたいする多のコンテクスト主義的優位」が主張される時代である。「今日ではすべてのものが偶然的経験の渦に巻き込まれている。悟性のカテゴリー、社会化や道徳の原理、主観性の構制、合理性そのものの基礎など——およそいっさいのものが別様でもありうる」(NM.220)⁽¹⁾。これがハバーマスの時代診断であるが、「いっさいのものが別様でもありうる」ということはとりもなおさず「いっさいのものが偶然的である」ということである。ハバーマスにとって現代とは偶然性の支配する時代、と捉えられていると言っても過言ではないのである。⁽²⁾

このようなポスト・モダンの偶然性の支配という時代状況との対決、これがハバーマスの基本的立脚点であると言ってよいだろう。したがってハバーマスの哲学的仕事をたどっていくならば自ずと彼の偶然性にたいしての思想がうきぼりにされてくるはずである。前もって言うておくなら、もちろんそれに対し

てハバーマスは必然性、一、全体性などに依拠する形而上学的立場を対置するのではない。彼の基本戦略は、「コミュニケーション的合理性」という新たな合理性の立場を提唱しつつ片や形而上学を批判し、返す刀でポスト・モダンを批判すると言う二正面作戦であるといえる。ハバーマスは『コミュニケーション的行為の理論』(1981)で、ホルクハイマーの行った、一方でのネオ・トミズムにたいする、他方で科学主義、実証主義にたいする二正面作戦立場にふれつつ、この二正面作戦は「批判理論の、哲学内部における争論対決を今日まで規定している作戦である」^③と述べているが、このような批判理論の戦略を自らも現代の思想的布陣のなかで実践せんとしているわけである。

八〇年代のハバーマスは、このような位置づけのもとで社会学理論や語用論を駆使して「コミュニケーション的合理性」の理論の彫琢を行っている。その際彼には哲学者として、出版の時期は前後しているが、現代と言う時代の哲学的問題状況の対自化の作業が先行していると思われる。論理的にはそのような哲学史的位置づけの作業を基礎に「コミュニケーション理論」の彫琢も可能なのである。近代哲学の流れを現代のポスト・モダン状況に至るまで整理し、己の立脚点を明確にする作業が、『近代の哲学的ディスクルス』(1985)や『ポスト形而上学思想』(1988)等の著作でなされている。

本稿は特にこの二つの著作を手がかりに、ハバーマスの現代理解、とくにその形而上学批判とポスト・モダン批判の構造を整理し、そのことを通して偶然性の問題への手がかりを得ることを目的とする。ハバーマス思想の枠組みの大まかなスケッチ以上のことは出来ないが、これらの問題の処理において一見悟性的に見えるハバーマスが、現代におけるきわめて弁証法的な思想家であることも明らかに出来ればと思う。

二。「一と多」の関係をいかに捉えるべきか

偶然性の問題はいうまでもなく、無限と有限、一と多、普遍と特殊といった問題や相対主義をめぐる問題、さらには、永遠と時間、歴史と理性、瞬間をめ

ぐる問題等と複合的な問題領域を形成している。まず1988年に出版された『ポスト形而上学の思想』を手がかりに、偶然性の問題と特に密接に関係する「一と多、統一性と数多性」の問題からみていくことにしよう。

ハバーマスにとっての基本的問題は近代とは如何なる時代であり如何なる哲学的問題性を内包しているのか、それとの関係で二十世紀の現代は基本的に如何なる哲学的地平にあり、そこでの問題はどのように設定されるのか、ということであるといつてよいだろう。彼の近代理解についてはおいおい触れることにするが、ハバーマスは二十世紀の哲学的思索の基本的動因を結論的に次の四つに整理している。それは、脱形而上学的思考、意識哲学から言語哲学への言語論的転回、理性の状況化、ロゴス中心主義の超克、の四つである。もちろんこれらの問題は全く独立した別個の問題というのではなく全体的に関連し合っており、学派を問わずこのような問題状況のなかで現在の哲学の営みがなされているとハバーマスは考えている。「一と多」の問題は形而上学の中心問題の一つであり、古代から現代に至るまでさまざまな捉え方の試みがなされてきたことは周知の所である。長い歴史をもつこの問題が現代においてどのように捉え直されるべきか。これは従来の哲学的問題に関する一エピソードといった周辺的事柄ではなく、自らも脱形而上学の流れに棹さすハバーマスにとっても現代社会を捉える基本的問題であるといつてよいが、この問題についてのハバーマスの考えを見ていくことは自ずと彼の偶然性についての立場を確認することになるであろう。

1. ヘーゲル以前

ハバーマスは「一と多」の問題に関する古代の議論は、プロティノスの『エネアデス』においてその運動が要約されている、とする。〈一にして全 to hen panta〉という概念によって多が一のもとで総体的に把握される。「具体的な出来事や現象の動的な相互貫入や相互対置は、それ自身では可変的生起をまぬかれたこのうえなく確固としたひとつの全体へととりまとめられる」(NM.156)。単数形の世界が現れ、一者は時間を超越しており、逆にそこから時間と時間的

なものが発現してくる。

そこでは世界内的なもの、現象は一義的に一者との関係で捉えられ、多義性は排除される。一者とは、本質、アイデア、形相、実体等を意味し、さらには第一根拠、原像、概念の概念などとみなされる。世界観の具体主義は否定されることにならざるをえない。ハバーマスによれば、このような形而上学の試みは神話や呪術と同じく、制御されない多への危機感、死と衰退、孤立化と分離、対立と矛盾、不意打ちと革新に対する根の深い不安の防衛に起因する。「形而上学が処理しようとする中心問題は、しかるべき権利を切り詰められた数多が、強制的でその限りで幻惑的でもある統一に対して叛乱する、という事情から生じるように思われる」(NM.158~159)。人間はこれらの状況を前にして、ひとつの調和的秩序を構想し一義化のため形而上学的な試みを行うというわけである。

「一と多」をめぐる三つの局面でその問題性が整理される。

第一に、一は多であるためには多のうちにあるつつ、一であるためには多を越えていなければならない。このパラドックスをどう考えるかという問題。これはヘーゲルの「同一性と差異との同一性はいかにして考えることができるか」という問いと同じである。

第二に、形而上学は個物の統合性や個性性を正当に評価できるか、という問題。形而上学では個体的なものは外的で偶然的なものとしてしか把握されない。「形而上学的思考様式は個体を前にして無力と化するのである」(NM.160)。これに対してドゥンス・スコトゥスは<このもの性>といった概念で対応せんとしたわけであるが、個体の言表不能性の問題は、普遍、特殊、個別の弁証法的把握を要請し、悟性批判を生じさせるとともに、ヘーゲル以後は同一性思考への批判、アドルノにみられるように非同一性の救出と言った試みにまで達している問題である。

第三は質料の評価をめぐる問題である。形而上学において質料は非存在として否定的にしか考えられてないが、世界内に存在するものは、その有限性、空間・時間内でのその具体化、抵抗性などを質料に負っているのである。質料は

否定や我性の原理、悪の原理の能動的力と考えられねばならないのではないか。これがシェリングや初期ホルクハイマー、ブロッホをつきうごかしている衝迫である、とされる。

一と多の問題はカントにおいては、感覚と表象の多様が悟性によって総合的結合へもたらされるという形での解決の試みがなされる。純粹統覚という自己意識の自我論的統一が表象の多様を統一的に支える根拠である。しかしこのような解決の仕方は存在者全体を主観の総合的働きに依存させることで、コスモスを法則定立的な自然科学の対象に引き下げることになり、現象世界はもはや、「目的に従って連関する全体」ではなくなる。全を一に統一することが有意義な連関（偶然性を受けとめ、否定的なものの力をそぐという）を樹立することにならないのである。そこでカントが提出するのが「叡知界」の概念である。この世界で各人は目的の国の立法的成員であるかのように行為する事により、「倫理的—市民的」共同体という全体を形成する。カントはこのような意味での理性の世界形成的総合を考えているといえる。

カントにおいては前述の三つの問題のうち、第一、第三の問題は解決されるが、個体の言表不能性の問題は未解決のままである。この問題は告白文学に見られるような文学的表現の模索や、特定の歴史、文化、言語との連関においてのみ真の個人が捉えられるとする歴史主義の試みを生み出していく起因となるわけである。

そしてヘーゲルが「形而上学的統一思考を改訂する最後の人」として登場する（NM.167）。ヘーゲルの〈全一 All-Einheit〉に関する独自の思想が、プロティノスからイエナ時代の同一哲学期のシェリングまでの形而上学的前提を改訂する、とハバーマスはいう。それについて節を改めて見て見よう。

2. ヘーゲルと近代のディスクルス

ヘーゲルがそれまでの形而上学を改訂するのは次の二つの観点によってである。

(1)一者を絶対的主体として考え、形而上学的思考図式を自己活動的主体性の

概念（自己意識，自己規定，自己実現と言った近代特有の規範的内容が引き出される源となる概念）に繋げるということ。

(2)一と多，無限と有限を媒介するものとして歴史を要求するということ。

この二つは異なった別のことを言っているのではない。それまで絶対者，一者は全に先立ち全を越えて確保されていた。しかし，「それに代わってヘーゲルは反省を，すなわち実体から自己意識へと高まりながら活動し，有限と無限との統一と差異を自分の内になっている精神の自己関係を，それ自身，絶対的なものとして捉える」(NM.168)。絶対的主体は世界過程に先行するのではなく，あくまでも有限と無限の相互関係そのものの内にだけ存する。その媒介過程が主体の自己産出の過程である。とすれば歴史がヘーゲルにとって形而上学的位置を占めるという事になるのは自明のことである。この歴史過程において，感覚界と道德界，理性理念の構成的使用と統制的使用，形式と内容の二元性が止揚される。そしてその都度形成される具体的普遍は，概念的に把握された個体にしかるべき権利を得させる，とされることになる。

特にハバーマスが基本的に注目している問題は「精神が歴史のなかに落ちる」という問題性である。それまでの形而上学的思考は宇宙論的な方向をとり，時間的なもの，変化する偶然的なものの意味は剥奪されていたのであるが，歴史と言う地平においては統一を樹立する理性の円環的構造に，偶然的なものや不確実なもの，多や差異が入り込むことになる。この新たに提出された「歴史と理性」という問題によってヘーゲルは近代の基本的問題性を明確にした。「近代のディスクルスにとって歴史と理性の連関こそは構成的なものである」(PD.134)。そしてこれが現在我々が偶然性を考える際の根底にある問題でもある。この点について章を改めてみることにしよう。

三。歴史と理性，時間と永遠

1。近代とは何か

このようにヘーゲルは近代のディスクルスの基本線を設定したのであるが，

そもそも近代とは何か。die neue Zeit と die moderne Zeit はどう関係するのか。ハバーマスは『近代のディスクール』においてコゼレックに依拠しつつ次のようにいう。「新しい時代 (neue Zeit)」とはキリスト教西洋における「到来すべき、最後の審判を待つようやく始まる未来の世界時代を意味していた」(PD.14)。それが宗教を離れた世俗化されたレベルでは、近代とは来るべき新たなものに向かって開けた時代を意味することになる。そして十八世紀になってから初めて一五〇〇年頃(新大陸の発見、ルネサンス、宗教改革などの)が回顧的に新しい時代の始まりとして捉えられるようになったのである。ヘーゲルもそのような意味で「新しい時代 (die neue Zeit)」は「現代 (die moderne Zeit)」であるというのである。

このような歴史意識はまた自己の位置を歴史全体の地平から反省的に現在化する歴史哲学的視点を生み出す。つまり歴史は単数化され、歴史は進展し、加速化するものであるという経験を生み出すのである。そして、革命、進歩、解放、発展、危機等の運動を示す諸概念がヘーゲルのキーワードとなる。ヘーゲルの時代精神という概念はこのような事態をよくあらわしているわけであるが、「あたらしい時代の地平から見て最も新しい時代のアクチュアリティと捉えられる現代」(PD.15)は常におのれと過去とを区別し、更新していかなければならない。従って「近代は準拠すべき基準をもはや他の時代を範型として借りてくることが出来ないし、またその意志もない。近代はみずからの規範を自分自身の内から汲み上げねばならないからである」(PD.16)。ハバーマスの近代理解の根本的視点はここにある。常に動揺し、不確かな、それでいて変化と前進を宿命づけられているのが近代という時代である、という把握である。そこでは人びとは常に偶然性の意識にさらされているがゆえに、当然ながら自己確認の要求がなくなることはない。ヘーゲルはこの事態を初めて哲学的に捉え返したのである。「ヘーゲルは、近代がその外部にある規範、即ち過去によって示唆される規範の枠組みから離脱していく過程を哲学の問題とした最初の人であった」(PD.26)。なんら安定した規範を持たず、不安定で分裂した状況に「差異論文」のヘーゲルが「哲学要求の源泉」を見ていることは周知のところ

